

浦田保利十七回忌追善

浦田肉門能会

能
舞囃子
遊行柳
山花実
姥筐盛
浦深越
田野賀
保貴隆
保彦之
親浩彦之

日 時：令和7年 12月 20日(土)

11:00開演 (10:30時開場)

於：京都観世会館

(京都市左京区岡崎円勝寺町44)

入場券：前売券 ￥5,000
当日券 ￥5,500
学生券 ￥2,000 (全席自由席)



ぴあ Getti
オンラインチケット
予約・購入ページ

お問い合わせ：浦田定期能楽会 ☎(075)723-6850

京都観世会館 ☎(075)771-6114

○Web サイトの公演情報からもご予約が出来ます <http://www.kyoto-kanze.jp>

京都観世会館

◆市バス5系統
「美術館前」

下車

◆市バス46・31・
201・203

系統「東山仁
王門」下車

◆地下鉄「東山
駅」下車

徒歩約5分

◆会館東隣に

駐車場あり



主催：浦田定期能楽会

11:00

解説「本日の曲目について」京都府立大学名誉教授 山崎 福之

11:20

素謡「実 盛」

尉 実 盛	越賀 隆之
遊行上人	福王 知登
従 僧	喜多 雅人

(地謡) 浦田 保親・浦部 幸裕・田茂井廣道・井上裕之真・寺澤 拓海

12:20頃

能 「花 筐」

照日の前	深野 貴彦
侍 女	樹下 千慧
王	樹下 應介
官 人	福王 知登
従 者	廣谷 和夫
輿 升	喜多 雅人
(笛)	中村 宜成
(小 鼓)	左鴻 泰弘
(大 鼓)	吉阪 一郎
	谷口 正壽

(後見) 杉浦 豊彦・深野新次郎

(地謡) 浦田 保浩・林喜右衛門・味方 團・河村 和貴
大江 泰正・大江 広祐・河村浩太郎・山崎 浩之

— 休憩 15 分 —

仕 舞 敦 盛 キリ	林喜右衛門
松 風	杉浦 豊彦
隅田川	井上 裕久
葵 上	片山 伸吾
鶴 飼 キリ	大江 信行

(地謡) 越賀 隆之・浦部 幸裕・宮本 茂樹・大江 広祐

狂言「太刀奪」

太郎冠者	茂山 逸平
主人	茂山 宗彦
道通りの者	山下 守之
(後見)	茂山 竜正

舞囃子「山 姥」

山 姥	浦田 保浩
(笛)	左鴻 泰弘
(小 鼓)	吉阪 一郎
(大 鼓)	谷口 正壽
(太 鼓)	前川 光範

(地謡) 片山 伸吾・橋本 光史・河村 和貴・大江 泰正・河村浩太郎

— 休憩 15 分 —

15:15頃

能 「遊行柳」

尉 老柳の精	浦田 保親
遊行上人	宝生 欣哉
従 僧	宝生 尚哉
従 僧	宝生 朝哉
所 の 者	茂山忠三郎
(笛)	森田 保美
(小 鼓)	曾和 鼓堂
(大 鼓)	河村 大
(太 鼓)	前川 光長

(後見) 井上 裕久・大江 信行

(地謡) 浅井 文義・吉浪 寿晃・橋本 光史・田茂井廣道
宮本 茂樹・井上裕之真・山崎 浩之・寺澤 拓海

附祝言

終了予定 17:00頃

素謡 実盛 (さねもり)

遊行上人(ゆぎょうしようにん)が加賀の篠原で説法を行うところへ、念仏の声に引かれて老人が聴聞におとずれるが、その姿は上人にしか見えない。上人が名を尋ねると、ただ弥陀の称名に遇うこと願つてのことと妄執の浮世の名は名のりたくないと断る。上人が重ねて問うと、篠原の合戦に討たれた斎藤別当実盛の魄が二百年を経てもなおこの世をさまよっていることを告げて姿を消す。上人が夜もすがら念仏を唱えて弔うところへ、華やかな出で立ちの老武者実盛の靈が現れる。実盛の靈は、手塚太郎光盛の討つた武将が黒髪であったものの、実は白髪を染めた実盛であったこと、錦のひた直たれ垂を着ていたのは故郷越前に錦を飾る思いであったことを語ると、最後には手塚太郎と組んで討たれた有様を見せ、菩提を願つて消えていった。

能 花筐 (はながたみ)

『神皇正統記(じんのうじょうとうき)』に見えるけいたい継体天皇説話や、『万葉集』、『古今集』の歌などにより構想された曲。皇子を慕う女性の悲恋を描く。花筐(はながたみ)は花籠のこと。形見(かたみ)の意も含まれる。

越前国味真野(あじまの)、福井県武生市に隠棲していた男大迹皇子(おおあとべのおうじ)は皇位継承のため都へ上ることなり、寵愛していた照日(てるひ)の前に別れの手紙と花筐とを遣わす。照日の前は皇子との別れを嘆き、名残り惜しくも形見の品を抱いて里に帰つて行った。(中入)

皇子は玉穂宮(たまほのみや)に即位して継体天皇となり、紅葉狩に出かける。一方、皇子を慕うあまりに物狂いとなった照日の前は、侍女とともに都にさすらって来た。天皇の御幸の前に出て二人を見とが咎め、臣下が侍女の持つ花筐を打ち落とすと、照日の前は「君の御花筐」と押し戴く。不審に思った臣下がわけを聞くと、これこそ男大迹皇子から賜つた花筐と語つて臣下を責め、皇子を懲んで泣き伏してしまう。そして面白く舞い遊ぶように促されて、照日の前は中国の漢の武帝と李夫人(りふじん)との悲恋の物語を歌い舞う(観阿弥作の曲舞(くせまい)「李夫人」に基づく)。天皇がその花筐をよく見ると、まさしく照日の前に与えたものであった。再会の機縁となった花筐の徳に感じ入りながら、照日の前は天皇とともに玉穂宮に帰り、永き契りを結んだのである。

能 遊行柳 (ゆぎょうやなぎ)

老木の柳の精の歌舞を見せる複式夢幻能で、老木の桜の精の舞う「西行桜」(世阿弥作と対比的に構想された曲。観世小次郎信光作)。

一遍上人(いっぺんじょうにん)の教えを諸国に広めようと、時宗の遊行上人が白河の関(今の福島県白河市)を通りかかると、一人の老人が現れて上人の道しるべをし、昔の街道のそばにある「朽木かけの柳」という名木のもとに案内した。老人は、これこそ西行が「道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」と詠んだ柳であると教えて、ふと消えてしまう。

僧が夜もすがら読経していると、老柳の精が現れて、柳にまつわる和漢の故事を語るのであった。なかでも「大宮人の御遊にも、蹴鞠(しゅうぐ)の庭の面、四本の木陰枝垂れて、暮に数ある沓(くつ)の音。」と源氏物語の有名な場面を想起させ、「手飼ひの虎(猫のこと)」のいたずらから、春の青柳の枝のように嫋やかな女三の宮を垣間見た柏木が、宿命的な恋におちいったことをほのめかす。さらに古代の舞楽・柳花苑(りゅうかえん)を思わせる序の舞を舞うが、やがて老柳の精は、足もよわよわと倒れ伏したかとみえて、あとには朽木の柳が寂しく残るばかりであった。

※事務局で許可した以外の方の写真・ビデオ撮影・録音はお断り致します。
※場内では携帯電話等の電源はお切りください。

※車でお越しの方は、京都観世会館東隣の有料駐車場をご利用ください。
満車の場合は平安神宮前の市営有料駐車場をご利用ください。

【次回予告】 令和8年 8月 2日 (日)

素謡「俊 寛」

越賀 隆之

能 「野 宮」

深野 貴彦